祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報　第90号

てんまてんじん

大阪天満宮
1125
菅原道真公
御神退1125年
式年大祭

菅公の初作「月夜見梅花」……2頁
御本社御屋根替工事……3頁
梅花殿の襖絵……4頁
公式キャラクター
『てんまろ』始動……5頁
明治中期の天満天神社……6頁
天満天神繁昌亭の新緞帳……7頁

表紙解説

菅原道真公 初めての漢詩「月夜見梅花」

二編の漢詩文集

菅原道真公と「梅」といえば、誰もが「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」の歌を想起されることでしょう。あるいは、菅公五歳の歌と伝わる「梅の花紅の色にも似たるかな　阿呼がほほにもつけたくぞある」を思い浮かべる方も少なくないでしょう（本社報41号）。しかし、菅公は、和歌だけではなく、幾首もの漢詩においても「梅」を詠まれているのです。

菅公御自作の漢詩は、『菅家文草』と『菅家後集』に収められています。『菅家文草』とは、昌泰三年（九〇〇）に菅公が御自身で自作の漢詩・散文を編集し、醍醐天皇に献上されたものです。その翌年に太宰府へ左遷されますが、配所においても詩作を続けられ、延喜三年（九〇三）に『菅家後集』を編集されてまもなく、薨去されました。

この『菅家文草』と『菅家後集』には、計五一四首の漢詩が載っていますが、そのうちの二十四首で「梅」を詠まれています。もっとも、数から言えば、桜・松・竹なども梅に劣らず詠まれているのですが、それでも「梅」には特別なご縁があるのです。

なぜなら、『菅家文草』巻頭一首「月夜見梅花」と、『菅家後集』巻末の一首「謫居春雪」の漢詩、すなわち、菅公の初作と絶筆において「梅」が詠まれているのです。

十一歳で詩作

菅公は、「月夜見梅花」を『菅家文草』の巻頭に収載するに当たって、次のように注記されています。

時に十一歳。厳君、田進士をして之を試みしむ。予、始めて詩を言う。故に篇首に載す

この「厳君」とは父君・菅原是善卿のこと、「田進士」は、是善の弟子で、菅公の教育にもあたっていた島田忠臣（号は田達音）のことです。文章生とは、大学寮において歴史・漢文学を学ぶ「紀伝道」の学生をいい、その唐名が「進士」でした。なお、忠臣の娘の宣来子は、のちに菅公の正室となっています。

右の注記は、「私が十一歳のとき、父は文章生であった弟子の島田忠臣に命じて、初めて私に詩を詠ませた。そのときの漢詩を本書の巻頭に載せておく」ということです。

菅楯彦「菅公図」

本誌表紙の絵は、その詩作の様子を描いたもので、明治三十五年（一九〇二）の菅原道真公御神退一千年式年大祭を機に、菅楯彦（一八七八～一九六三）が描いたものです。賛は藤沢南岳（一八四二～一九二〇）です。

楯彦は、大阪の市井風俗を数多く描き、昭和三十七年（一九六二）に初の大阪市名誉市民に選ばれた画家です（本誌七頁に紹介の生田花朝女はその弟子です）。南岳は当代随一と賞された儒学者で、父・藤沢東畡が江戸後期に開いた漢学塾「泊園書院」を明治六年（一八七三）に再興し、漢学・漢詩の振興に努めました。

初作「月夜見梅花」

表紙絵の右が是善卿、左が菅公、その横から覗き込んでいるのが忠臣です。上部の賛に「月夜見梅花」が記されています。その本文を引き、下段に読み下しを記しておきます。

月耀如晴雪　月耀は晴雪の如く
梅花似照星　梅花は照星に似たり
可憐金鏡転　憐れむべし金鏡転じて
庭上玉房馨　庭上玉房馨る

意訳すると、「輝く月の光は晴れた日の雪のように清らかで、月夜の梅の花は照る星のようだ。鏡のように丸い月が移動する下では、庭に咲く梅の花房がいい香りを放っている」となります。

それにしても、このとき菅公は数え年の十一歳、今の小学校四、五年生です。このような平仄を合わせた漢詩を詠まれたことに驚きます。のちに「文道の祖・詩境の主」と仰ぎ慕われる才能の片鱗が早くも芽生えているようです。

なお、この詩作の様子は、菅公と北野天満宮の由来を物語る『北野天神縁起絵巻』にも載っていますが、少しアレンジされています。すなわち、「是善卿が、十一歳の菅公に試しに作詩してはと話しかけると、その言葉の終わらぬうちに作詩を終えられた」というのです。菅公の才能がより強く語られているのです。

絶筆「謫居春雪」

『菅家後集』の巻末の「謫居春雪」については、紙幅の制限上、第一句だけの紹介でお許しください。

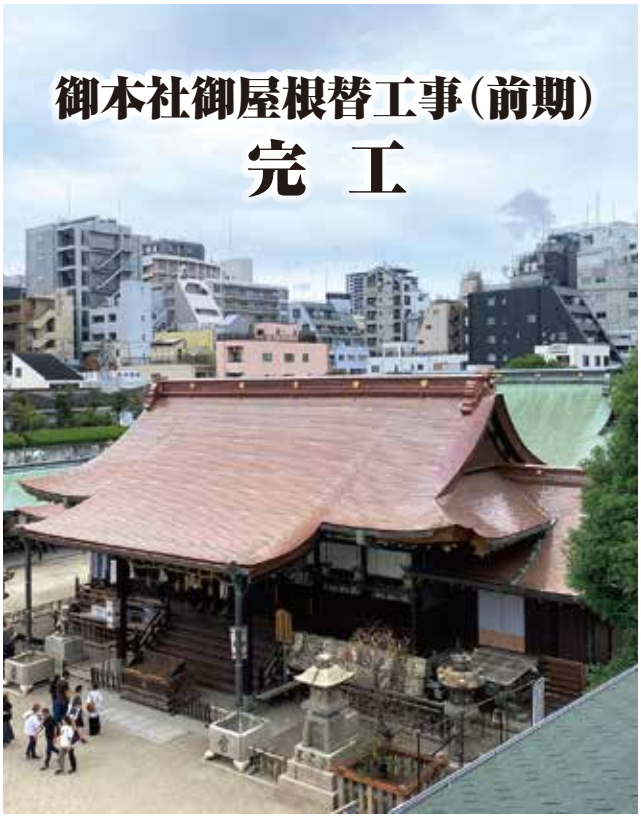
第一句の原文は「盈城溢郭幾梅花」で、読み下せば、「城に盈ち郭に溢るるは幾ばくの梅花か」となります。

その詩意は、「（春の淡雪が降る様子をみて）城郭の内外にどれだけの白梅が咲いているのかと勘違いしてしまう」としておきましょう。

初作で梅花を星にうつし、絶筆で雪を梅花にうつした首尾照応の御生涯に改めて想いを馳せてしまいます。

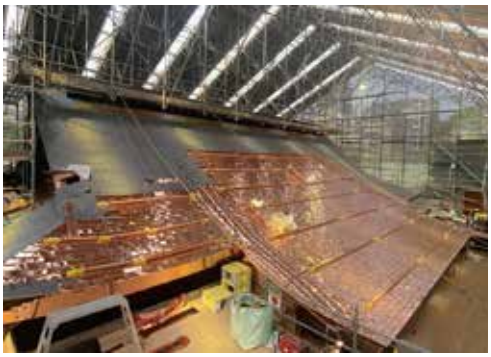
（高島幸次）

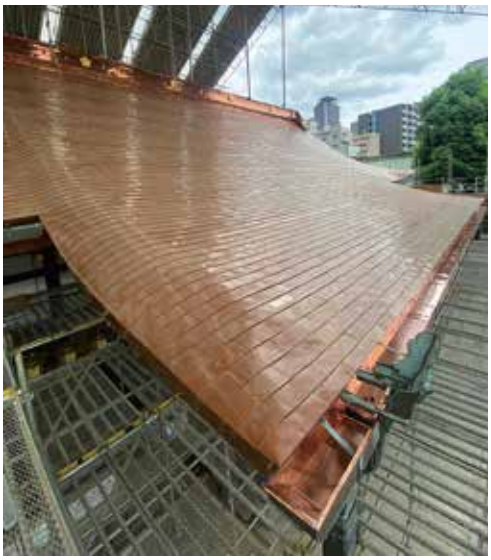
御本社御屋根替工事（前期）完工



明年令和九年四月に斎行されます菅原道真公御神退千百二十五年式年大祭の記念事業の一環として計画されました御社殿修復工事（前期）は、去る令和七年八月に着工され本年九月末に完工し、十月一日に完工奉告祭が斎行されました。

この計画は、御本社社殿（本殿・幣殿・拝殿・渡殿・瑞垣透塀）のうち、今回は前期として拝殿から幣殿の約半分の御屋根を修復することを中心に、内部工事として冷暖房設備の設置と照明設備の器具改善等を行いました。





この工事は株式会社金剛組に請け負いを依頼し、伝統の技術と最新の工法を以て無事に施工を完了されました。金剛組は西暦五七八年に聖徳太子が四天王寺を建立する際に百済から招いた宮大工のひとりである金剛重光を初代とする世界最古の企業ともいわれる会社で、当宮の遷宮など造営工事には江戸時代から携わっている企業です。

工事にあたっては令和六年七月に本社社殿が表大門とともに大阪市の指定文化財に指定されたことにより計画時における事前申請をはじめ各段階において部位毎に解体調査を行い、形式や技法、古材の保存方法などを協議しながら進められました。

その中で屋根の軒周り部分については当初予想されていたよりも損傷が軽く、工事範囲は少なくなる部分もありました。今後の工事予定としては、式年大祭の斎行後、他の事業計画として「神具収蔵館」の新設に着手し、その後に御本殿後期工事計画が進められることとなっています。

拝殿正面から葺き替えられた銅の御屋根を拝しますと、すがすがしい気持ちになりますが、もう少しするとお正月を迎えます、春には式年大祭が盛大に斎行される予定です、皆様のご参拝を心からお待ち申し上げます。

「梅花殿」襖絵についての新知見
―京都御所・小御所とのつながり

このたび、当宮「梅花殿」を飾った「襖絵」には、京都御所「小御所」の障子絵（襖絵）と密接なつながりのあることが判明しました。

● 梅花殿／貴賓殿

現在、天満宮会館・寿の間に飾られるのが、梅花殿襖絵です（ただし複製展示。オリジナルは大阪市立美術館寄託、一部当宮保管）。

梅花殿は境内東側の銅板葺入母屋屋根の客殿で、参集殿・神楽殿とともに国の登録文化財。落成は昭和三年（一九二八）、菅公一〇二五年祭斎行の年にあたります。落成時から結婚式場に使用されますが、明治四十三年の当初案は「伊勢神宮の古材銅板」を用いた「貴賓殿」として計画され、紆余曲折をへて十七年後、昭和三年に落成したと知られます。＊近江晴子「社殿探訪④まぼろしの貴賓殿―現在の梅花殿」（平成十五年、社報四十四号）参照。

● 梅花殿 襖絵の概要と経緯

梅花殿は上段・中段・下段の三室からなり、襖は全部で四十六面、一画題を二面ないし四面に描いて、全部で十八画題が描かれています。

担当画家は、大和絵系の日本画家、東京、京都、大阪画壇の錚々たる顔ぶれが揃います。原在泉、上田耕冲、益頭峻南、巨勢小石、三宅呉暁、佐久間鉄園、平林探溟（以上昭和三年以前に没）、津端道彦、望月玉渓、伊東紅雲、庭山耕園、上田耕甫、深田直城、磯田長秋、菅楯彦。画家の没年から、明治末年頃制作開始され、建築の延期もあって、昭和初年に完成と推定しています。絵は大和絵の様式で、画題は四季絵、名所絵や年中行事が描かれます。

襖絵は天満宮会館（昭和四十五年開館）寿の間に、ある時期から（昭和五十年ころの会館改修時か）オリジナルが飾られ、境内他施設にも飾られたといいます。展示での傷みから修理（平成七年、一部未修理）、汚濁のおそれから複製が製作され、オリジナル（所在不明分除く）を大阪市立美術館に寄託（平成八年）。令和六年には第二御文庫から所在不明分も見出され…という経緯をたどります。展示場所や時系列の詳細は現在調査中です。

● この夏の調査による新知見

このたびの調査によって、

①当初の襖配置が確定できた（写真図版参照、立体復元試作）

②小御所襖絵との密接な関係が判明した（安政度の小御所襖絵の画題、図様から配置までを転用・引用）という新知見が得られました。

● 京都御所・小御所との関係

小御所は、幕末慶応三年十二月「小御所会議」（公卿や諸藩代表の御前会議、徳川慶喜辞官納地を決定）の舞台と知られます。清涼殿の東北、母屋は上中下段の書院造り。他の御殿同様、安政度造営の建物でしたが、昭和二十九年焼失し、昭和三十三年再建。安政度襖絵には、原在照が参加しており、梅花殿に原在泉（在照の子）の参画があって小御所の構成や図様を用いた制作に主導的立場で関わったのではと想像しています。

＊掲載図版は梅花殿襖絵のうち、原在泉「小朝拝図」

さらに見逃せないのは、梅花殿襖の表具、縁取りの裂です。「軟錦」と呼ばれる、おもに御所の襖や几帳に用いる絹物が用いられています。ただ文様のうち御所の菊紋を憚って、梅花殿は梅紋に替えているようです。

● 当宮と御所・朝廷とのつながり

詳細いまだ分析中ながら、速報的に報告したのは、落成から百年、「菅公一一二五年祭」を控えての新知見に不思議な縁を感じ、近世における当宮の朝廷・御所とのつながり、とりわけ、大塩の兵火後、天保期の光格天皇下賜・束帯天神画像に象徴されるつながりが、明治末から昭和前期にも認められる、その好事例と思われたからに他なりません。

いずれにしても、これらの詳細は紹介の機会を俟ちたいと存じます。

（文化研究所 鈴木幸人）

伝統と未来を繋ぐ新たな社宝
公式キャラクター『てんまろ』始動

令和八年、大阪天満宮に新しい風が吹き込まれました。当宮初となる公式キャラクター『てんまろ』の誕生です。

七月二日の天神祭斎行記者発表で初お披露目した『てんまろ』は、天神様の御使である「牛」をモチーフに、社紋である「梅鉢紋」、そして伝統の品格と親しみやすさをあわせ持つキャラクターに仕上げました。

この『てんまろ』は、単なる愛くるしいキャラクターにとどまらず、当宮が推進する「開かれた広報企画室」のシンボルであり、目に見えない文化的資産を現代の形で守り育てる「デジタル社宝」としての役割を担っています。

十月一日には、御本社拝殿御屋根葺き替え工事完工奉告祭に合わせて、手水舎中央に「てんまろ石像」を設置いたしました。色鮮やかな季節の花々が水面を彩る「花手水」の中に鎮座する姿は、早くも参詣者の心を和ませる境内の新名所となっており、花手水は今後も年に数回定期的にお披露目する予定です。

そして今後は、七五三詣での着ぐるみ登場や、地域の商店街・企業様とのコラボレーションなど、ワクワクするような展開をどんどん仕掛けてまいります。

私たちが目指すのは、西暦九四九年の創祀から一〇七七年の間に培ってきた伝統をただ守るだけではありません。若い世代や子供たちが気軽に神社に足を運び、この天満の街に愛着を持つきっかけを作ることです。

『てんまろ』をハブとして、氏地エリアの皆様と固く結びつき、地域の経済と文化を一層盛り上げてまいります。

来年に迫る「千百二十五年式年大祭」に向け、『てんまろ』は皆様と共に歩み、街全体に笑顔と活気をもたらすシンボルとなります。どうぞ温かいご愛顧と積極的なご活用をお願いいたします。

※『てんまろ』のご活用につきましては、当宮の登録制となりますので、広報企画室までご照会ください。

菅公を偲び、月を仰ぐ祭典
秋思祭

大阪天満宮の「秋思祭」は、菅原道真公が太宰府へ左遷された延喜元年（九〇一）、配所において初めて迎えた秋の月を仰ぎ、遠く都の空を思いながら、かの有名な「秋思」の詩篇を詠まれた故事に由来する祭典です。

この祭りは古くより「観月宴」として、本殿前庭において斎行されてきました。元治元年（一八六四）まで続けられていましたが、世情騒然たる時勢の中で一時中断されました。その後、昭和六年（一九三一）に再興され、殿内祭典から庭上祭典へと改められました。昭和十三年の社報には「当宮唯一の庭儀」として再興されたことが記されています。

昭和二十五年（一九五〇）からは、旧暦八月十五日にあたる月夜に斎行される祭典となり、「仲秋祭」と称されるようになりました。昭和二十七年からは「祖霊祭」と同日に斎行され、さらに昭和五十年頃より、現在の「秋思祭」の名で呼ばれるようになりました。

祭典では、篝火が灯る中で、水干・烏帽子姿の神童が鈴虫の虫籠を奉納するほか、七草をはじめとする種々の献饌・献花・献香・献茶などが行われます。また、菅公を偲ぶ吟詠、そして「御神楽之儀」が奉奏され、古より伝わる「秋思」の詩情を今に伝えています。

秋の夜、虫の音に耳を澄まし、月を仰ぎながら、遥か千百余年の昔に思いを馳せる――。秋思祭は、菅公の深い望郷の念と、四季の移ろいを慈しむ日本の心を、今日に伝える大阪天満宮ならではの祭典です。

明治中期の 天満天神社

明治二十八年(一八九五)発行のガイドブック『大坂けんぶつ』は、「天満天神社」の項で、天神祭や当宮裏門付近の賑わいについても紹介しています。

発行元は心斎橋筋の矢嶋誠進堂、執筆は同店主の藤の家主人（矢嶋嘉平次）です。以下に紹介文を三分割して引用し、解説を加えます。

①天満天神社

天神橋筋より一筋東、天満大工町の内にあり。天暦年中、村上帝の勅願に依り創立ありし神社にて、祭神は菅原道真なり。大坂随一の大社にて相殿に手力雄命・法性坊尊意・猿田彦太神、蛭児尊を祭れり。其外、摂社・末社数多あり、また絵馬堂・文庫・神輿蔵等ありて、日々参詣人群集し、例月廿五日の縁日には最も賑へり。

同書が当宮の地名と記す「天満大工町」は、現在の「東天満二丁目・天神橋二丁目」に当たります。しかし今でも当宮の裏門を「大工門」と呼び、その出たところに「天満食糧㈱大工町販売店」があるように、旧名は名残をとどめています。

創祀については、天暦三年（九四九）に村上天皇の勅願によるという当宮の伝承を踏まえたものです。

御祭神として、菅原道真公＝天神様と四柱の御神名を挙げていますが、そのうちの「法性坊尊意」は天台宗の僧侶だったので、明治初年の神仏分離政策によって、廃祀を余儀なくされ、明治七年（一八七六）以降は、「尊意」の代わりに、道真公の祖である「野見宿禰」が配祀されています。よって、この御神名は著者の取材不足による誤りです。

「絵馬堂」については、当時は本殿を入った左右に二ヵ所ありましたが、現在はありません。「文庫」は、一昨年に解体された第二文庫のこと（社報87号）、「神輿蔵」は今も本殿の北側にあります。

②天神祭

殊に七月廿五日はお渡りと唱へて、神輿を浪花橋の北詰西の浜より舟に乗せ、諸行列とも数十艘の舟にて堂島川を下り、途中の川々に篝(かがり)をたきて松島のお旅所に渡御あるを例とせり。其群集雑沓譬(たと)へんにものなく、是また大阪随一の祭礼なり。

このころの船渡御は、浪花橋（難波橋）北詰から堂島川を下航し、松島の御旅所(現、千代崎行宮)に向かいました。その航路には何艘もの篝船が停泊し、両岸には何百本もの篝火が川面を照らしていました。

『大坂けんぶつ』挿し絵

③天満天神裏

また本社の裏門近傍は写真店、劇場、女芝居、浄瑠璃、祭文、新内、等いろくありて、千日前の賑ひに劣らず、近き頃までは本社に接続したる霊符と云へる処に遊廓めきたるものありて、本社の清浄を穢すべき想ひありしが、府庁の沙汰にて廃滅に属したれば神霊も満足に思さるゝならん。

大工門(裏門)あたりには演芸小屋や飲食店が林立していました。門を出た右手(現在の繁昌亭の地)には、楊弓場や女義太夫の「南歌久席」、寄席の「杉の木席」が、左手(現在の駐車場)には、写真館の「明十軒」、寄席の文芸館(のちの天満花月)、浪花節の「国光席」などが並んでいました。

当時の千日前や道頓堀は「晴（ハレ）」の、天満天神裏は「褻(ケ)」の繁華街でした。前日から準備して晴れ着を着て観劇にいく晴(非日常)の千日前、ふと思いついて普段着で出かける褻(日常)の天満天神裏という感じでしょうか。

江戸後期の裏門近傍には「霊符」や「八軒」などの遊廓がありました。

「霊符」の名は当宮末社の霊符社に因み、「八軒」は文字通り八軒の遊廓があったことによります。明治二年(一八六九)の松島遊廓の公許に伴い、松島への移転を命じられて「廃滅」し、そのあとに「天満八軒」と呼ばれる演芸・遊興の町が生まれました。その伝統が繁昌亭に受け継がれているのは奇縁ですね。

（高島幸次）

境外の天満宮・天神祭（十）

天満天神繁昌亭二十周年記念
新緞帳「天神祭」

当宮北側は、古くは寄席や芝居小屋が立ち並び、「天満八軒」と呼ばれる演芸の地でありました。平成十八年（二〇〇六）、この地に開場したのが天満天神繁昌亭です。

当時の上方落語協会会長・桂三枝（現在、六代文枝）師匠の志と、当宮寺井種伯前宮司の尽力により、戦後約六十年ぶりに、日本で唯一の上方落語の定席が復活することとなりました。

緞帳「天神祭」

その天満天神繁昌亭も今年で開場二十周年を迎え、その特別公演は連日満席の盛況でした。今回ご紹介するのは、二十周年を機に新調され、九月十四日に披露された緞帳「天神祭」です。

原画の作者は、おなじみの生田花朝女（一八八九～一九七八）。数ある天神祭画のうちの一点を元にしており、川島織物セルコン様により製作されました。

寸法は、高さ三三五×幅七一〇㎝。緞帳に原画を描くにあたって、その画風は可愛らしくデフォルメされ、来場者の目を和ませるかのようです。

現在の繁昌亭の総来場者数は約二三〇万人とのこと。これから先の二十年に向け、今後も「上方落語の定席」として伝統の継承に努めて行かれることでしょう。

寺井宮司、天神寄席にゲスト出演

二十周年を迎えた天満天神繁昌亭では、毎月二十五日の夜席には、『天神寄席』と銘打ったテーマ落語会を開催しています。去る四月二十五日のテーマは、「てんてん天満の天神さん」、ゲストとして寺井種治宮司が出演しました。

当日の番組は、当宮にゆかりの落語四席、桂健枝郎「天満の白狗」・笑福亭笑助「初天神」・林家花丸「お迎え人形の恋」・笑福亭銀瓶「質屋蔵」、および社報88号でご紹介しました講談・旭堂南雲「天神屋敷の由来」でした。

「天神寄席」鼎談中の寺井宮司（中央）

その合間の鼎談は「式年大祭に向けて」というテーマで、寺井宮司が出演し、桂春若師匠、当宮文化研究所の高島幸次所長との鼎談により、来年四月の式年大祭に向けての抱負を話しました。

9月15日、寺井宮司も参加して
20周年記念の鏡開きが行われた。

寺井宮司、天満警察署の「一日署長」

四月八日、春の全国交通安全運動の一環として、寺井宮司が天満警察署の「一日署長」を務めました。

当日は、同署の栗木賢彰・天満警察署署長と職員、大阪府警音楽隊の計六十名ほどが来宮され、一日署長の挨拶、および音楽隊の演奏などが行われ、交通安全思想の普及・浸透を図り、交通ルールの遵守と正しい交通マナーの実践を習慣付けることにより、交通事故防止の徹底を図ることをアピールしました。

栗木賢彰 天満警察署署長（左）と
制服姿の寺井宮司（右）

社務所　電話番だより
よくあるお問い合わせ
『お箸の話』

お箸を使う国は、日本のほかには、韓国・中国・ベトナム・タイなど、東アジア、東南アジアの十ヵ国ほどです。

これらの国々は、米食文化圏ですが、現代では日本料理・中国料理の世界的普及により、欧米諸国でも箸を使える人はずいぶん多くなってきたようです。

『古事記』には、スサノオノミコトが高天原から出雲国に降り立ったとき、肥河(簸川)の上流から「箸」が流れてきたので川をさかのぼると、一人の娘と老夫婦にであったと記録されています。有名な「ヤマタノオロチ伝説」の冒頭の場面です。

しかし、流れてきた箸が、どのような形状のものだったかは解りません。と言うのは、弥生時代の遺跡からは一本の竹を折り曲げてピンセットのような形状の「折り箸」が発見されているからです。これは人が食事に使うものではなく、祭祀において神に配膳する祭器として使われたのではないかと考えられています。

現在の私たちがイメージする二本一対の箸を食事に使うようになったのは、七世紀初めころからのようです。六〇七年に遣隋使として派遣された小野妹子が持ち帰った箸と匙を、聖徳太子が朝廷の供宴儀式に採用したと伝えられています。

これ以降、箸は食事作法として広まり、平城宮跡からは木製の二本箸が数多く出土していますし、正倉院には立派な銀の箸が所蔵されています。奈良時代には箸を食事に使う習慣が定着していたようです。

箸には、様々な形や材質のものがあり、また、菜箸や真魚箸、取り箸のように直接手や口が触れないようにする箸もあります。

いずれにしても食事に使うものですから食べ物の命と、私たちの命をつなぐ用具であるという見方をすると、とても神聖な気持ちになるとともに、自ずと感謝の気持ちが表れてきます。

お箸をお行儀よく使うことで食事をともにする人たちまでより一層おいしく感じるようになればさらにいいことですね。

大阪天満宮献詠　風月社
令和八年四月～九月

四月兼題　朧月

学友と並び歌ひしおぼろ月
今友かきはつつかなしやと
伊藤　涼子

夢に来し母の笑顔と夫の声
目覚めてひとり見る朧月
家治　綾子

五月兼題　田植

田から田へ水うれしげに流れゆき
田植待たるる山合の里
北岡　由紀子

エンヂンの音をひひかす早苗田の
風のそよきも若夏をしる
佐野　秀子

六月兼題　窓

幼き日大きな窓を弟と
拭き掃除せし朝を偲ぶ
中瀬　央子

雀鳴く窓より外を眺むれば
麦の初秋風の通ひ路
坂井田　礼子

七月兼題　船

あかつきの水面にこぼるる花を見に
小さき舟をややをらこぎ出づ
南口　一二美

おぼつかな恋のなみまに棹さして
速き瀬を行く宇治の浮舟
木下　常世

八月兼題　滝

大阪は西にひらける夕映えに
玉出の滝は三すぢかがよふ
南口　一二美

飛沫あげ滝は唸りぬ滝といふ
文字に竜あることを思ひぬ
小林　賢太

九月兼題　月

庭隅の色なき風に咲く花の
桔梗の白に宿る月影
鈴木　敬子

爽やかな風吹き来たる窓辺にて
見上ぐる夜空円き月あり
忠津　清治

秋思祭兼題　豊

つつがなく一日終りて老いの身は
心豊かに月を仰ぎぬ
乾　恵子

日の本の祀り気高くよどみなく
民の暮らしの豊かなりけり
松村　暁二

天神さまと私（11）

石船　登代

私は昭和三十二年に、なにわ橋（ライオン橋）北詰の樋ノ上町、現在の西天満一丁目に三姉妹の長女として産まれました。

アルバムを開きますと、もちろん白黒写真ですが、大阪天満宮でのお宮参り・七五三参り・初詣の写真があります。

そして、我が家は祖父・父が御鳳輦講の講員、祖母が福梅講の講員として大阪天満宮に御奉仕しており、家の前を通る天神祭の行列に、装束を着付けた祖父との写真もあります。家の南を流れる堂島川岸に川床を造作して、行き交う「お迎人形船」「どんどこ船」や、鯛が形作られた「鯛船」などを身近に感じ楽しんでおりました。

小学生の時には、福梅講の牛曳童児として妹と渡御に参加させて頂きました。牛を曳いて大門を出発する時の胸の高鳴り、そして大勢の見物人たちの中を歩く緊張感は深く心に残る良い思い出となっております。

アルバムを見返すと当時の出来事が次々と蘇ってきます。八月の天神踊りには櫓が組まれ、三味線・太鼓・唄の生演奏が響き渡っていました。小学生の頃は浴衣を着て、期間中は毎日通っていた事を鮮明に覚えております。

また大阪天満宮にある梅香学院にも、華道・茶道のお稽古に通わせて頂きました。天満宮会館のお庭にあるお茶室で、いま振り返れば何とも贅沢な経験であったと感じています。

こうして振り返りますと、私の人生は幼い頃から「天神さん」と共に歩んできたのだと改めて感じます。

氏子として、福梅講の講員として「天神さん」と七十年の御縁を頂いた事に感謝し、今も大阪天満宮の行事に携わらせて頂き様々な人の繋がりや楽しみを広げて頂いています。

参拝により心のゆとり・安らぎを持つことが出来、有り難い事だと思っております。

天満宮スカウト 活動日誌

◆ガールスカウト大阪府第八十一団

今夏は、道明寺天満宮のガールスカウト百四十九団と合同キャンプを行いました。ハイキングやクラフト、プラネタリウム、星のブランコ、キャンドルサービスなど、シニア・レンジャーは岩窟巡り、仲間と一緒にさまざまな体験をしました。

年齢や団を越えて声を掛け合い、協力する中で、子どもたちのたくましく成長する姿を見ることができました。シニア・レンジャーはスターバックスで職場体験を行い、バリスタの仕事やコーヒーについて学びました。実際に抽出やテイスティングにも挑戦し、自身の将来について考える貴重な体験となりました。

◆ボーイスカウト大阪第九十八団

去る八月、カブスカウトは滋賀県甲賀市の田村神社境内で二泊三日の舎営を行いました。

川遊びやメスティンを使った飯盒（はんごう）炊爨（すいさん）など、キャンプならではの行事を自然豊かな境内で楽しみました。

そして、キャンプと言えば欠かせないのがキャンプファイア。二日目の夜、皆で火を囲いながらレクリエーションをしたり、各組による昔話をアレンジしたスタンツが披露されたりしました。どの組も個性的なアレンジが加えられており、笑いの絶えない心に残るキャンプファイアとなりました。

神社の境内で行われた今回のキャンプでしたが、二日目の朝には本社に昇殿させていただき、厳かな空気の中スカウト達も静かに参拝しました。スカウトの活動には信仰の気持が大切です。この舎営を通して、友情や知識を育むと共に、信仰心も養われたことを願います

天満天神研究会（天天研）の報告

令和九年（二〇二七）「菅公御神退千百二十五年式年大祭」を見すえて、天満天神研究会を令和六年十二月から継続的に開催してまいりました。

多様な専門分野の研究者によって天神信仰の諸相、とくに当宮の歴史や文化、宝物類にかんして、従来の見解を洗い直し、改めて成果公開をめざす試みです。

今般、第十一回目の研究会を当宮文華館3階にて開催いたしました。

●第十一回 天満天神研究会

令和八年九月十九日

報告者：藤立紘輝

（九州大学大学院博士課程・太宰府天満宮文化研究所研究員）

報告題目：

戦国期における
大阪天満宮遷宮と吉田家
―新出史料の分析を通じて―

今回の藤立氏による研究報告は、近年刊行の続く史料（京都・吉田神社神主、吉田兼右の日記『兼右卿記』）を用いて、同史料の詳細な解読から、従来は知られるところでなかった（少なくとも出席者一同には未知の事柄）戦国期（十六世紀）における当宮の御祭神や遷宮の状況が示され、これまでの当宮史の欠を補う重要な報告と位置付けられました。

後に示すように、これまで最多の参加者数となり、報告内容の重要性、報告者の堅実で真摯な姿勢と相俟って、活発な意見交換がなされました。当研究会がめざすところの、ひとつの実現を見る思いがいたしました。

＊第十一回出席者（敬称略・順不同）
藤立紘輝、竹居明男、北山円正、増井正哉、松浦清、永原順子、横山恵理、大利直美、竹嶋康平、町田大悟、長谷川貴信、服部麻衣、浦田佳彰、仲真矢、臼杵浩秀、鈴木幸人。

また、前号でも記した松浦清先生らによる天神画像調査も継続中です。とくに光格天皇下賜の天神画像については、その下絵調査も京都市立芸術大学芸術資料館の協力を得て実施できましたが、そのかかわりから、梅花殿襖絵の新知見に繋がりました。既報のとおり、来春の四月～六月、大阪くらしの今昔館での展覧会で、それら成果をご紹介いたします。

（文化研究所 鈴木幸人）

浪速菅廟吟社詠草

深翠 浦田佳彰 撰

七月課題　江上晩夏

不孤　松村暁二　大阪府

三伏江塘夏已衰　一風觸去老軀肌
不煩杖策遅遅歩　獨樂殘生日暮時

《訓読》三伏の江塘、夏已に衰え。一風　触り去る　老躯の肌。杖策を煩わさず遅遅として歩み、独り残生を楽しむ日暮の時

《通釈》熱い三伏の時、川沿いはもう夏が衰え、秋が始まっている。川で冷えた風が一陣、私の老いた肌を触れて去ってゆく。杖を酷使せずゆっくりと歩く。このように一人余生を楽しんでいるのだ、この夕暮れに。

八月席題　盂蘭盆詞

深翠　浦田　佳彰　岐阜県

朱風故里碧瓜田　祖母蹲居同去年
謝未飾錦猶納履　孝心奈被馬牛牽

《訓読》朱風の故里・碧の瓜田、祖母の蹲居すること去年に同じ。謝すらくは未だ錦を飾らず、猶お履を納れるがごときを。孝心　馬牛に牽かるを奈せん。

《通釈》夏風の吹く故郷、緑の満ちたウリ畑。祖母が畑に蹲って農作業をするのは去年と同じである。申し訳なく思うことは、出世できず、実家の金を盗んでいるも同然なこと。精霊馬や牛に牽かれてゆく祖母をどうしようか。報いようとは思うのに。

九月課題　郊居夜坐

鵬城　北野　清治　大阪府

青山不改水西東　久濶歸鄉顯氣融
夜座軒頭簫鼓響　抱懐秋社少時同

《訓読》青山は改まらず水は西東す。久濶の帰郷　顕気融す　夜に軒頭に座すれば簫鼓響く　抱懐す　秋社少時に同じなりと

《通釈》秋になっても山の夏色は変わらず、川も同じように流れていく。久々に帰郷すれば秋の空気が漂っている。夜になり軒下に座れば祭りの笛や太鼓の音が聞こえる。抱懐することには、秋祭りは幼き日と同じように執り行われているのだ、と。

来年の大阪天満宮の式年大祭に向けて献詠の漢詩を募集いたします。

・絶句（五言七言どちらでも可）
・題「観梅」「自由題」
・投稿料無料。但し詩集を希望される方には送料込みで千円

漢詩の投稿を是非お願いいたします。この会は毎月第一日曜に大阪天満宮の梅香学院で詩会を行っております。会員募集中です。連絡先↙

Kambyo-Ginsha@outlook.jp

広報室だより

大阪天満宮の魅力と未来への誓い

広報企画室長よりご挨拶

今春、前任の三宅室長から引き継ぎ広報企画室長に着任いたしました稲原亨亮（いなはらきょうすけ）と申します。私はこれまで四十年余り、広報企画や広告宣伝・販売促進プロモーションの世界で「どうすれば商品の良さが伝わるか」「どうすれば人の心が温かくなり共鳴共感していただけるのか」を常に考え活動してまいりました。

これからはその経験を全力で注ぎ込み、伝統ある大阪天満宮と、天満の街の魅力をどんどん発信してまいります！「もっと面白く、もっと身近な天神さん」を目指してチームの仲間達とともに汗をかいて励んでまいります。境内や街で見かけられましたら、是非お気軽にお声がけください、よろしく御願いいたします。

大阪天満宮、十の魅力

広報企画の視点で改めて当宮を見つめ直しますと、当宮には他にはない圧倒的な「人間味」と「地域の熱量」があふれています。

一、日本三大祭「天神祭」の誇り　街全体が一つになって熱狂する真夏の神事～神賑行事は、なにわの人々と商人の底力そのものです。

二、菅公ゆかりの聖地　菅原道真公が太宰府へ向かう際、旅路の無事を祈られた大将軍社が始まりという深い物語があります。

三、学問の神様への祈り　受験合格を願う無数の絵馬には、参詣者皆様の未来への希望がたくさん詰まっています。

四、都会の真ん中にある抜群の立地　交通の便がよい街中にありながら、境内に入るとすっと心が落ち着く不思議な空間です。

五、日本一長い参道「天神橋筋商店街」　神社と商店街が隣り合い、長年のあいだ共に商売と暮らしを支え合っています。

六、地域に溶け込む境内　参拝の場であるだけでなく、通勤通学の抜け道であり、放課後には子供たちの歓声が響く日常の素敵な居場所です。

七、「天満天神繁昌亭」との隣接　当宮が敷地を提供している繁昌亭から聞こえるお囃子の音など、上方落語や芸能の文化がすぐそばに息づいています。

八、しなやかに支える女性神職と巫女　細やかな気配りと穏やかな笑顔で、参詣者の皆様をいつも温かくお迎えしています。

九、次世代を育む育成の場　ボーイスカウトとガールスカウトの活動拠点として、地域の子供たちの成長を永年 見守っています。

十、人生の節目を彩る「天満宮会館」　伝統の神前式と最高のおもてなしで、ご家族の新しい門出～人生儀礼を一緒に祈りお祝いいたします。

千百二十五年式年大祭へ向けて

これらの魅力は、神社だけで作られたものではありません。千年以上もの間、この天満の街で暮らし、商売を営み、汗を流し、神社を「自分たちの宝物」として愛してくださった皆様方がおられたからこその奇跡的な軌跡です。

来年は「千百二十五年式年大祭」という歴史的な節目を迎えます。これは神社だけの行事ではなく、天満の街全体がもっと元気になり、次の世代へ繁栄をバトンタッチするための大一番です。

この脈々と続く伝統の熱量をさらに大きくしていくため、皆様の温かいご奉賛と熱いお力添えを、何卒よろしくお願い申し上げます。

人事任免

〈昇進〉

出仕　堀内信吾

（一句）柔道の次は騎士道さあ神道

令和八年四月一日付

帰幽報告

総代　林　秀昭

令和八年七月六日

千百二十五年の時を越え、受け継がれる祈り。

大阪天満宮は
「天満の天神さん」として
長きにわたり人々に
親しまれてきました。
この大阪の地に
歴史と伝統を紡ぎ、
幾世代もの人々の
願いを受け止めながら
今日まで歩みを
重ねてまいりました。
明年迎える
千百二十五年式年大祭。
それは長い歴史を
未来へと受け継ぐ
大切な節目です。

またこの節目に、
拝殿の御屋根葺き替え
工事も竣功を迎えました。
大切に守られてきた
拝殿を未来へつなぐ歩み。
受け継ぐことの尊さは、
人と人との縁を結び、
新しい家族を築く
結婚という人生の
大切な節目にも
通じるものがあります。

天神様の御神前で
夫婦の誓いを結び、
ご家族とともに祝い、
大切な方々と
喜びを分かち合う。
その一日がこれからの
人生にそっと寄り添う
記憶となるように。
歴史の節目に、
人生の節目を。
大阪天満宮のもとで
ふたりの新たな門出を
心を込めてお迎えします。

御神前で結ぶ、ふたりの誓い

庭園で紡ぐ、これからのふたり

歴史の節目に、人生の節目を。

大阪天満宮　天満宮会館

編集後記

来年四月の「菅原道真公御神退千百二十五式年大祭」に向けて進めておりました御本社拝殿の御屋根葺き替え工事も、ようやく九月に無事に終えることができました。

一年数ヵ月ぶりに覆い屋根が取り除かれると、赤みを帯びた褐色の屋根が光り輝きました。工事前の緑青色の落ち着いた屋根を見慣れた目には、眩いほどの光沢です。

しかし、この輝きも数ヵ月もすれば茶色から黒褐色へと落ち着いていきます。さらに十数年も経つと、私たちに馴染み深い緑青色になります。このように経年で彩りが変化していくのは銅板屋根の特徴です。ご参拝のたびに、その移り変わりを見守っていただければと思います。

大阪天満宮社報
てんまてんじん　第90号
令和8年10月20日印刷
令和8年10月25日発行
発行人　寺井種治
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041
大阪市北区天神橋2-1-8
TEL 06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社